

## 中村家と狭川塾

良寛は13歳から18歳まで大森子陽の狭川塾に学んだ。そのとき地藏堂の中村家に寄住して狭川塾に通った。

中村家は良寛の父以南の生家である新木家と親戚であり、酒造業を営み、町年寄をつとめていた。

現在の中村家では、良寛が寝起きした二階の部屋を保存している。中村家のすぐ近くに願王閣があり、願王閣は勝軍地藏を祀る鎮守で“地藏堂”と呼ばれ、それが地名の発祥となる。良寛の弟子の遍澄は、文政9年(1826)良寛69歳のとき、願王閣主になった。閣主となった遍澄は、良寛の世話ができないとして、島崎村の能登屋木村屋への移住を勧めたといわれる。

大森子陽の狭川塾がどこにあったかは特定されていないが、良寛の詩に「憶昔総角蔵 従游狭水傍」とあり、「狭水」は町のわきを流れる西川のことであるから、狭川塾はその近くにあったものと考えられる。

師の大森子陽は、のちに出羽(山形県)の鶴岡に移り、そこで没するが墓は地藏堂から大河津分水路を渡った長岡市寺泊地区の万福寺にある。良寛は円通寺で修行のち故郷に帰ると、すぐ子陽の墓に詣でたようである。現在、万福寺の大森家墓地に「子陽先生の墓を弔う」の良寛碑が建っている。